ジャック・デリダによる中国語 [1]

ヘクター・G・カスターノ（国立政治大学）
翻訳：森脇透青（京都大学）

※ 角括弧 [ ] は著者カスターノによる補足・省略、亀甲括弧〔 〕は訳者による補足を示す。

イントロダクション

西洋とその「他者」との関係についての再概念化にデリダの哲学が寄与する以上、他なる思想的伝統との交流という問題は、脱構築にとって不可避のものでさえある。この観点から「デリダと中国」というトピックについて多くのことが（大抵はデリダによる中国語文字（スクリプト）についての使用そして誤用についての批判という形式において）書かれてきた。この哲学者〔デリダ〕自身も、「中国の友人の友人の署名」と題されたテクストで、中国語を学んでこなかったことの後悔について触れている（Derrida 2005a, ix）。このテクストは、リュシアン・ビアンコへ捧げられた共同刊行物への序文である。ビアンコはフランスの中国学者で、デリダの友人であり、パリの高等師範学校のルームメイトでもあった。デリダ自身、『グラマトロジーについて』における中国語文字（スクリプト）についての記述には念頭にビアンコがあったことを認めている。とはいえ私はデリダのテクストにおける中国への参照を伝記的な語り口で再構築するつもりはない。デリダによれば、ビアンコの中国への関心は、私たちが「中国を学び、そこで起きていることを遅れなく理解し、私たちのヨーロッパ中心主義の狭量さから自由になり、すでに中国から私たちのもとへと到来し続けているもの、さらに将来的にはますます、いっそう強く、いっそう速く到来するだろうものを観察」しなければならない、という信念から生じている（Derrida 2005a, ix）。

「中国の友人の友人の署名」でデリダが「中国の問い」と呼ぶものに彼自身が言及するのは、『グラマトロジーについて』を除けばごくまれな機会においてのみである。この問いは彼の世代にとっては、「私たちの夢のすべての、そして私たちの不眠についての、さらには私たちの政治的な悪夢の固有名かつ換喩的形象」（Derrida 2005a, iv）であった。これはハイオット（2011, 184）が「中国の夢」と呼んだものである。それは現実存在する場所とその固有名（中国）についての言及ではあるが、そこには「実際の知的関係」が存在せず、「その観念はほとんど完全に自己への、そして自己ではないものへの言及によって産出される」のだ。デリダは「中国の夢」を悪夢として提示することによって、この夢に対する自身のコミットメントの両義性を確証する。『グラマトロジーについて』以後に薄れていったデリダの中国への期待にもかかわらず、彼の生の終わりごろに、そして彼の著作の中国語への翻訳がはじまったときから、中国は決定的なイシューとして

[1] Héctor G. Castaño, ‘A Chinese Word by Jacques Derrida’, in *Derrida Today*, vol. 14, No. 2, November 2021: pp. 148-168.

戻ってきたのである（Derrida and Zhang 2020; Zhang N. 2002）。デリダが中国語を学んでいたら、この「中国への問い」は、西洋形而上学の脱構築において主要な役割を果たしただろうか？　デリダは、『グラマトロジーについて』における中国語文字（スクリプト）についての彼自身の注記を再考したのだろうか？

先ほど引用した中国語を学ぶことの重要さについての一節は、本稿で検討するいくつかの問題を導入している。デリダは中国から「私たち」ヨーロッパ人――「ヨーロッパ中心主義の狭量さ」とデリダが呼ぶものに苦しむ「私たち」――へと「到来するもの」の強まるリズムについて強調する。「すでに中国から私たちのもとへと到来しているもの」の「すでに」は、私たちがそのリズムと力をもはや無視しえないような出来事の不可避性を記述するように思われる（「いっそう強く、いっそう速く」）。主な困難は、いかにしてこの出来事を評価するのか、というものだ。それは、中国が絶対的他者の「実際の」名であるかのように、根本的に異なり、「私たち」には翻訳不可能で不可知な、そのような出来事なのだろうか？　そのような考えはデリダが中国について思考するやり方ではない、というのが私の主張である。引用中の「すでに」が暗示するように、この出来事はその固有の歴史性を備えている。その上、のちに分析する『グラマトロジーについて』の非常に限られた一節（そこでデリダは中国文明をあらゆるロゴス中心主義の「外部」だと示唆している）が引き起こす混乱にもかかわらず、この著作における中国への参照は、全体として、ジャン・フランソワ・ビルテールが「哲学的中国」と呼んだもの――ライプニッツの時代以前から現代に至るまで、哲学者が使用するために想像された中国の概念――（Billeter 2014, 43）への一貫した批判である。〈différ*a*nce〉〔差延〕という語の中国語翻訳の概念的な含蓄〔implications〕のみならず、多くのヨーロッパ人哲学者に共有されている中国の「幻影」についてのデリダの明示的な批判を分析することによって、いかなる仕方でデリダの対象、絶対的他者としての「中国」よりもむしろ、西洋形而上学における中国語「クリプト〔crypt〕」であるかを示したい。長くそして錯綜した歴史過程から生じたこのクリプトは、東洋と西洋、内部と外部、表音的と非表音的、などなどといった頑強な区別のありふれた組み合わせを確証するのではなく、むしろそれに逆らうのである。

1. 非ロゴス中心主義的エクリチュール？

中国へのデリダの主な言及は『グラマトロジーについて』に現れる。とりわけ「実証科学としてのエクリチュール」では、デリダは現に存在する書記システムのあいだの差異を理解しようというフランスの学者たちによる同時代的な企てのいくつかを論じている。ジャン・ジェルネによる討議会「中国、エクリチュールの心理学的様相と機能」についてコメントしながら、デリダは中国語エクリチュールが「あらゆるロゴス中心主義の外部で発展する文化の強力な運動の証言」（Derrida 1967, 137–38; 1998b, 90〔上 189〕[2]）を私たちに提供するという、問題含みな主張を行う

[2] 〔訳註〕ジャック・デリダ『根源の彼方に　グラマトロジーについて』（上）・（下）、足立和浩訳、現代思潮社、1972 年。以下、邦訳文献のあるものは訳註で対応箇所を指示するが、『グラマトロジーにつ

のである。当の文脈から離れてこの文章を読むとき私たちは、デリダにとって非ロゴス中心主義的な文化が、西洋の伝統とその経済的、政治的、知的な支配の「脱中心化」の外的な支柱でさえあった、と考えうるかもしれない。つまりデリダはあらゆるロゴス中心主義の、そしておそらくは音声中心主義の外部の領域というファンタジーを中国語エクリチュールに投影しようとしたのだ、と。こうした考えこそ、デリダにおける中国語文字（スクリプト）についての言及をめぐる論争の核心であり、結果として何人かの批判者は、この点が脱構築のアキレス腱〔弱点〕だ、と訴えているのである。

最も素直な批判の形式から出発してみよう。この批判によれば、デリダは中国語文字（スクリプト）を非表音的かつ表意文字的であると考え、さらに、それゆえ、ロゴス中心主義の「脱構築」のためにアルファベット文字（スクリプト）よりもいっそう適したものだと考えている（Jung 1984; Chang 1988; Cheng 1995; Jirn 2015）。この類の批判者たちは読解の根拠を『グラマトロジーについて』のわずかな一節に置いており、この著作のほかの議論を考慮しておらず、デリダによる他の仕事にも言及しない。こうした学者たちは、中国語文字（スクリプト）の定義という観点からシノグラフ〔sinograph; 中国文字〕、漢字エクリチュールについてのデリダあるいは他の西洋的観念を批判するが、この観点はジョン・デフランシスの影響力ある仕事に由来する。デフランシスは西洋における中国語文字（スクリプト）についての多くの神話を批判する点で正しいが、とはいえ彼はシノグラフを「表音文字の極端に悪しき例だが、それでもやはり表音文字」（1986, 130）へと還元している。この還元については、より細かくさらに発展した文字学的（グラマトロジカル）な調査の見地からの吟味に値するが、これはこの論考の範囲を超えている。

批判者たちが注目し強調しているのは、中国文明と中国語エクリチュールの「外部」を主張した後、すぐさまデリダがエズラ・パウンドとアーネスト・フェノロサへと言及していることである。この両者は中国学者にとって何十年にもわたって強迫的な執着の対象となってきた。たとえばファ・ヨウ・ジョンは、フェノロサとパウンドを念頭におき参照しつつ、デリダの哲学は「西洋のアルファベットエクリチュールを超えた東洋の象形文字的あるいは表意文字的エクリチュールの優越性へと傾倒している」（Jung 1984, 220）と断言する。言い換えれば、デリダの中国語文字（スクリプト）についての説明はオリエンタリストのそれだということになるだろう。

おそらくデリダによる一節の全文は引用するに値する。というのも、これこそが長い一連の誤解の源泉だからである。

> 必然的な脱中心化は、それ自体が哲学的あるいは学的な行為であることはできない。というのもここで問題になっているのは声とエクリチュールとを結びつける別のシステムへの接近を通じて、エピステーメーの言語と文法との基礎的カテゴリーを脱臼させることだからである。［…］突破［la percée］が、文学と詩的エクリチュールの側でいっそう確実かつ鋭敏な

いて』からの引用のみ、文中で邦訳頁数でのみ示している。なお文中のデリダの著作からの引用は、原文およびカスターノの使用する英訳を参照しつつ、邦訳を改変した場合がある。

> ものであったのも当然であった。そして同様に突破が、ニーチェがそうしたように、エピステーメーの超越論的な権威と支配的カテゴリー、すなわち存在に第一に訴えかけ［qu’elle sollicitât］、そしてそれを揺るがせにしたのも、当然である。これがフェノロサの仕事の意義であり、その仕事がエズラ・パウンド自身そしてパウンドの詩に与えた影響はよく知られている。還元不可能に表記的（グラフィック）な彼の詩は、マラルメの詩とともに、西洋のもっとも根強い伝統からの最初の切断であった。パウンドのエクリチュール上で中国的な表意文字が発揮する陶酔作用〔fascination〕は、このようにして、そのあらゆる歴史的重要さを与えられている。（Derrida 1967, 139–40; 1998b, 92〔上 192〕）

ジェーウェイ・チェンの主張（Cheng 1995, 137）とは逆に、この一節におけるデリダの主な関心は「表意文字」の概念にあるのではない。後述するが、デリダは他の場所でこの概念を扱っている。ここでの主なトピックは、文学（マラルメにおいてそうであったように、エクリチュールの表記的（グラフィカル）な次元への現代的関心を伴う）といくつかの哲学的企図（つまりはニーチェのそれ）が、『グラマトロジーについて』が西洋形而上学の現代的な形式として識別する当の「エピステーメー」の核心をいかにして問題としているか、である。形而上学の「突破」にとってのフェノロサあるいはパウンドの重要さについての評価という点で、あるいは中国の「表意文字」による彼らの「陶酔」の意義という点でデリダが間違っていようがいまいが、それが自動的にデリダを「表意文字的な」詩の大いなる支持者にするというわけではない。このことは二つの理由による。第一に、『散種』の小さな節で、デリダは彼自身を中国語エクリチュールに適用される「表意文字」の概念から遠ざけている。彼はソレルスの『数』が、パウンドの詩に反して、いかに中国語をエキゾチックで根本的に異なる文字（スクリプト）としてではなく、「さまざまなエクリチュールの異質性がそれ自体エクリチュールである」ことの証拠として扱っているかを示そうとしてさえいるのだ。

> これまで、中国語の表記的（グラフィック）な形態を導入することは——とりわけ「パウンド」のことが思い浮かべられるだろう——、少なくとも、陶酔作用という補足的〔代補的〕効果でもってテクストを飾り、ページに彩りを添え、言語的表象のある種のシステムの拘束から詩学を解放しながらそのページに向き合うという効果があった。最上の場合には、機能の規則を知らない人にもすぐに発揮されうるようなデッサンの力を作動させるという効果があった。（Derrida 1972, 433; 1981, 356）[3]

デリダは「パウンド」に抗してソレルスを肯定するが（彼の名が引用符にくくられていること、そして「陶酔作用〔fascination〕」という語の使用に注意しよう。この語は上記に引用した『グラマトロジー』の一節でも表れていた）、パウンドの「限定された」文字（スクリプト）理解がいかに西洋詩と西洋文学の言語の変容に寄与したかを考慮する場合には、中国語文字（スクリプト）のパウンドによる用法がた

---

[3] 〔訳註〕デリダ『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013 年、575 頁。

んに装飾的なものでしかなかったという〔デリダの〕示唆は誤解を招くものだ（Claro 2012, 418–19）。

第二の理由は、デリダが「表意文字詩〔ideographic poetics〕」のひとりの支持者であり続けることはできないというものである。というのも、そうした支持者は、究極的には、漢字が諸事物の有契的〔motivated〕な「図像」（それは有契的な象徴である）であって、現実と言語のあいだのある種の自然な紐帯に根拠づけられていることを前提しているからである。このことはフェノロサにとっては真実であっただろう――その上、フェノロサによる「自然」あるいは「像」のような概念への言及や、漢詩における音の分析はより閉じた分析を要求している。フェノロサの分析は、記号の素朴さという形式に対する反省からは遠く隔たっているからである（Saussy 2008, 39–40）。しかしながら、こうした前提はデリダのアプローチを理解するための適したフレームワークではない。実際『グラマトロジーについて』は中国学者ジャン・ジェルネを批判している。ジェルネにとっては、漢字は「それ自身に似た、単独かつ唯一の現実の象徴」として働く表記的（グラフィカル）な記号である（Gernet 1963, 38; quoted in Derrida 1967, 138; 1998b, 91〔上 190-191〕）。デリダにとっては、フランス語であれ中国語であれ、いかなる記号も単独の実在を参照してはいない。なぜならシニフィアンはその固有の反復可能性として現実存在しており、「いかなる場所においても純粋な「現実」、「単一性」、「単独性」に出会うような機会はない」（Derrida 1967, 139; 1998b, 91〔上 190〕）からである。これは（有契的な）象形文字的記号と（恣意的〔無契的〕な）表意文字的記号とのソシュール的区別に対するデリダの批判のうちに、すでに暗示されている考えである。

それゆえ、デリダが二種類の象徴（表音的象徴と非表音的象徴、アルファベット的象徴と表意文字的象徴）に区別を設けていた、あるいはデリダが彼自身にとっての「表意文字」概念を用いていた、とは誰も断言できないのだ。記号作用の一般構造を、さらにこの構造が彼が「痕跡」と呼ぶものへと依存していることを参照して、デリダはいかなるアルファベット文字（スクリプト）についても中国語のような非アルファベット文字（スクリプト）と同様に、分析の同じレベルに置くのである。この視座からすれば、実際に象形文字的な起源を持つ（すなわちある「実在」の形状の表象から「有契化」された）数少ない漢字についてさえ、その構造においては、他の記号と同じくらい恣意的なのである。さらに、形而上学の「表記的（グラフィカル）な突破」（これはデリダがパウンドあるいはフェノロサのうちに見出す最も興味深いものだろう）は、マラルメあるいはニーチェのような詩人と哲学者のみならず、精神分析学者たちも考慮している。『散種』の同じ箇所は、メラニー・クラインから非常に長い引用句を引いているが、ここでクラインはアルファベット文字（スクリプト）の表記的（グラフィカル）な次元の非表音的な諸々の可能性を強調している（Klein 1985, 64; quoted in Derrida 1967, 132–34; 1998b, 333–34〔上 194-196〕）。それゆえ、この小さな節を中国語エクリチュールについてのデリダの疑わしい誤解という視点からのみ読解するのは不正確である。

さらにエクリチュールの歴史家たちが文字（スクリプト）システムの発展における表記（グラフィズム）の役割にデリダが言及する際、デリダは中国語のみならずアステカ語、マヤ語やその他の文字（スクリプト）も参照している。彼の議論によれば、エクリチュールの歴史家にとっての主要な問題とは、実在のエクリチュールのシステムを手段として、彼の対象を決定することにある。デリダにとってこのことは二次的な問

題ではないし、たんに循環論的開始点を明示的にするだけで、簡単に解決される問題でもない。哲学者、言語学者、あるいは人類学者が、いくつかの文字（スクリプト）は表音的であり、それ以外は非表音的だ、と主張するとき、〔デリダによれば〕しばしばある目的論的な評価が含意されている。こうした評価は、あらゆるエクリチュールのシステムが、表音的あるいはアルファベット的なシステムに対して必ず先立つか、必ず遅れるものとなることを前提する。こうした理解はデリダの議論において決定的な側面であり、だからこそ、中国語文字（スクリプト）の非表音的な質を選り好みしているという点でデリダが非難されることはありえないのである。彼は明示的に次のように述べているからだ。「「表音的」と「非表音的」は〔…〕ある種のエクリチュールのシステムの純粋な質では決してありえない。それはあらゆる記号作用一般の内部で、多少なりとも数の多く、支配的な典型的要素の、抽象的な特質である」（Derrida 1967, 135; 1998b, 89〔上 186〕）。

結局のところ、十七世紀・十八世紀を通じた中国語文字（スクリプト）についての「ヨーロッパ的幻覚〔hallucination〕」へのデリダによる批判は言及に値するものである。非表音的な普遍記号法というライプニッツの企図から、「私たちの時代に対してさえ、正当化された仕方で及びうるような〔その企図の〕あらゆる誘惑にもかかわらず」（Derrida 1967, 117; 1998b, 78〔上 162〕）自身の原（アルシ）–エクリチュールを区別するデリダの努力が示すのは、彼が彼自身の中国モデルを産出しようと試みてはいない、ということである。ライプニッツならびに彼の同時代者へのデリダによる批判において、デリダはマドレーヌ・V・ダヴィッドの分析を忠実に追いかけている（ダヴィッドへの参照は、〔批判者たちが〕デリダの「幻覚」批判をデリダ自身に対して向ける際、体系的に無視されている）。ダヴィッドにとって、「中国的」そして「エジプト的偏見」は、その文字（スクリプト）を歴史から切り離し、話される言語との本質的な関係を忘却することから帰結する（Derrida 1967, 113; 1998b, 76〔上 157-158〕; V.-David 1965）。デリダはこれを非常に明示的に述べている。ライプニッツにとって、「中国語文字（スクリプト）を声から解放するものは、恣意性とその発明の策略によって文字（スクリプト）を歴史から引き抜き、哲学に与えるものでさえある」（Derrida 1967, 113; 1998b, 76, translation modified〔上 157-158〕）。デリダはライプニッツの「偏見」の「ロゴス中心主義的」本性を強調している。この「偏見」は、中国語並びに中国語エクリチュールの制限された理解から帰結するのではない。むしろ、中国語文字（スクリプト）の「ドメスティックな表象」を産出するその時代のあらゆる言語学的発見を形成する、あるひとつの解釈（Derrida 1967, 117–18; 1998b, 79〔上 162〕）、すなわちイエズス会的言語学によって導入されたいわゆる「表意文字」の概念を反映したものである。デリダの観点においては、記号学〔characteristica〕におけるパロールという媒質（メディウム）の除去は、経験的言語によって導入された誤謬から〈理性〉を解放することによって、思考とその表記的（グラフィカル）表現との失われた結びつきの回復を企てていたのである。

もちろん、デリダによるライプニッツ読解はまったくフェアなものではない。自身の記号学に対して中国語文字（スクリプト）がモデルとして果たしうる役割を考慮する際、ライプニッツは彼の全人生において、評価と拒絶のあいだで揺れ動いている（Widmaier 1983, 82）。そのうえ、ライプニッツの記号学の精緻さへと、さらには（書かれた記号を含む）記号が思惟の構成要素であるという彼の確信へといっそうの注意を払うのであれば、エクリチュールについてのライプニッツの哲学的考

察がデリダが呈示するほどには「ロゴス中心主義的」ではないことは明白である。しかしデリダのライプニッツ読解に欠点があるとはいえ、『グラマトロジーについて』におけるパウンドとフェノロサへの参照が、デリダによるこの明示的な「ヨーロッパ的幻覚」から分離して考察されえないことは明らかである。

ここまで私は、中国語文字（スクリプト）の「外在性」についてのデリダによる問題含みの肯定というコンテクストを要約してきた。論争のもととなった一節にはこうある。

> 中国語あるいは日本語のような非表音的文字（スクリプト）は、非常に早くから、大いに表音的要素を含んでいた。こうした文字（スクリプト）は表意文字と代数学によって構造的に支配されており、このようにして、私たちはあらゆるロゴス中心主義の外部で発展する文明の力強い運動の証言を持ち合わせている。（Derrida 1967, 137–38; 1998b, 90〔上 189〕）

事実、デリダはここで「表意文字」と「代数学」の概念を再導入している（この概念についてデリダは、ライプニッツあるいはソシュールの読解において明白に批判している）。しかしデリダは即座にその重要性を相対化するのである。「エクリチュールは〈声〉を自身へと還元するのではなく、システムのうちに組み入れたのである」（Derrida 1967, 138; 1998b, 90, translation modified〔上 188〕）。

ここで再登場する「表意文字」概念と、中国語文字（スクリプト）がパロールを組み入れた〔incorporated〕という考えとのあいだにはいくらか緊張がある。しかし、いかなる純粋な「表音的」あるいは「非表音的」文字（スクリプト）も存在しない、という考えがこの著作におけるデリダの議論にとって決定的であることを考慮すれば、ここには漢字（シノグラフ）の表意文字的理解のためのわずかな余地が残されている。デリダがここで主張しているのは、中国語のような歴史的なエクリチュールのシステムが、パロールのアルファベット的再現前化とは異なる仕方を通じて、声との関係を編成するという可能性であり[4]、その可能性はアルファベット文字（スクリプト）にも同様にある、とデリダは考えているのである。このことは、中国語を表意文字と取り違えたデリダの誤解なるものをめぐる論争が間違っていたことを証明している。しかし、本当の問題はいまだ解決されてはいない。「あらゆるロゴス中心主義の外部」という考えには、どのような意味が想定されているのだろうか？

---

[4] 〔原注〕デリダが言及しているジェルネの討議会に続いて、中国語のローマ字表記化に関する議論が行われたことは注記に値する（Gernet 1963, 45–49）。当時、当時、中国では pīnyīn 拼音によるローマ字表記化が実施されており、西洋の学者の多くはこれが漢字を完全に置き換えることになると考えていた。デリダの『グラマトロジーについて』のもう一つの源泉であるジェームズ・フェブリエ（James Février）の『エクリチュールの歴史』では、1956 年に中華人民共和国の漢文改革委員会〔Committee for the Reform of the Chinese Written Language〕が発表した「若き中国学者への手紙」が引用されている。この手紙では、日常的に使われている漢字に代わって、拼音〔pīnyīn〕が使われるようになると断言している。漢字は、文学的遺産のローマ字版の出版を保証するために、中国の歴史と文学の部門でのみ教えられることになっていたのである（Février 1984, 560-61）。そのたった二年後、中国首相の周恩来はアルファベット改革プロジェクトの中止を発表した（Zhong 2019, 7, 157）。

2. ロゴス中心主義の「内部」

ローラン・ミレシ（2018）は「他者を幻惑するデリダを幻惑させる」このやり方の背後にひそむ論理を分析しているが、私はここで、この批判のより洗練された説、つまり非西洋の文脈における脱構築受容の困難さを示唆する説を評価したいと思う。レイ・チョウ（2001, 70-71）が言うように、デリダの中国語知識の不十分さに対する糾弾は、デリダの思想に対する必要な知的対決を回避する手段でさえある。彼女は、デリダにとって中国語が表意文字であり非表音的言語であった、と断言しながら他の批判者たちに追随しているが、デリダの「誤り」がいくらかのポテンシャルを持っていることをも考慮している。「デリダのケースが示すのは、ステレオタイプは認可されうるということだ。すなわち、表意文字言語としての、無音のわずかな図像からなるエクリチュールとしての中国語というクリシェがなければ、脱構築として知られるラディカルな認識論的切断は、おそらくそのような形で生じることはなかっただろう」。確かに、チョウは脱構築に対する中国語の重要さを過大評価している。彼女はデリダの表意文字的幻覚への批判を無視してさえいる。ここで、チョウの論考に対するボームとステーテン（2001, 657–60）による短いが洞察に満ちた応答に立ち返る必要はない。しかし、彼女のデリダ読解は、私たちを決定的な問題へと誘ってもいる。すなわち、脱構築の「ラディカルな認識論的切断」が、（中国であれ、その他いかなる種類であれ）「外部」の実在を前提しているかどうか、という問題である。

デリダは『グラマトロジーについて』における中国へのもうひとつの参照において、外部の実在を前提しているように思われる。ヘーゲルを評する際、デリダは「パロールに対する」エクリチュールは、「ヨーロッパに対する中国である」と主張する。この一文が属する文脈に対しては、今一度充分な注意を払う必要がある。脱構築的な意味における「エクリチュール」は、パロールに対する外的な存在としては理解されえない。というのもこのことはまさに形而上学が主張することだからである。したがって、このアナロジーにおいて、中国がヨーロッパに関して単なる外的実在として理解されることはありえない。しかしながら、中国と西洋のこのいくぶんか月並みな対立が、実際には中国についてのステレオタイプ的な語法を暴露するのである。これは、ガヤトリ・C・スピヴァクによる英訳版『グラマトロジーについて』の序文で提起された問題である。彼女は、ロゴス中心主義の民族中心主義的帰結に対するデリダによる告発が、裏返しの民族中心主義を伴うということを確言している。この裏返しの民族中心主義は、デリダによる「ロゴス中心主義は西洋に固有であり［…］、『グラマトロジーについて』第一部で西洋による中国への偏見のようなものが論じられるにもかかわらず、デリダのテクストにおいては一度も、東洋が真剣に探求されたり、脱構築されたりすることはなかった」（Spivak 1998, lxxxii）[5]。

ここでの争点は、ロゴス中心主義が「西洋に固有」と考えられうるかどうかである。おそらく

[5]〔訳註〕ガヤトリ・C・スピヴァク『デリダ論　『グラマトロジーについて』英訳版序文』田尻芳樹訳、平凡社ライブラリー、2005 年、191 頁。

この点を明確にするために、デリダはかなり後のテクストで、『グラマトロジーについて』ではそのものとして明示的に定式化されていなかった「ロゴス中心主義」と「音声中心主義」のあいだの区別へと立ち戻っていた。

> ロゴス中心主義と音声中心主義とを私が区別したとき――かなり昔のことです――、次の事実が明確に標記されていました。すなわち、ロゴス中心主義は、ロゴスのそのシニフィアン、その語への参照によって、それは私が先ほど定義していた歴史的–文化的な地域（アブラハム的、福音的宗教と哲学）に固有なものだという事実であり、このロゴス中心主義は人類史におけるこの地域あるいはこの時代を規定するように私には思われました。しかし、音声中心主義は、すべての文化において口語的パロールと表音エクリチュールに与えられる権威や覇権を定義するという点で、〔…〕ヨーロッパを越えて、非音声的なタイプのエクリチュールを用いる文化でも、すべての文化で、つまりは明らかに非アルファベット的、非音声的な文化においても普遍的なものであるように思われたし、そして今もそのように思われます。ご存知のように、たとえば中国文化においては、そこには表音的要素があるにもかかわらず、エクリチュールは表音的なタイプのものではありません。とはいえやはり、声〔vocal〕の公認された権威のしるしの数々が存在しており、このことは私の見解では、音声中心主義は普遍的であるが、ロゴス中心主義はそうではない、ということを意味しています。（2011, 347–48）[6]

デリダは音声中心主義の普遍性についての言明を、中国語エクリチュールへの新たな参照とともに描いている。中国語エクリチュールは、「明らかに非アルファベット的」（事実、後続する「非表音的」という語は、この議論にとってあまり有益ではない）であるにもかかわらず、しかし音声中心主義的なままであり、「声の公認された権威」に結びつけられたままなのである。このことは、デリダにとって、「ロゴス中心主義の外部」の存在が、脱構築の免除を意味しないことを示唆している。もちろん、「音声中心主義」がつねに特定言語に結び付けられている以上、脱構築の課題はメタ言語学的観点から取り組まれることはできないが、『グラマトロジーについて』がすでに警告しているような、狭い相対主義的観点から考察されることもできないのである（Derrida 1967, 11, 26; 1998b, 3, 14〔上 16-17〕）。ここでの課題は、音声中心主義の脱構築が、異なる言語やエクリチュールのシステムの特異な構造の中からのみ着手されることを理解することだ。結論に向けて主張するように、「翻訳」は、言語の異質性を脱構築するための哲学的な可能性を考えることができるフレームワークである。

ここで、文化的に規定された「ロゴス中心主義」に対する中国語エクリチュールの疑わしい「外在性」をどのように評定するべきだろうか？　スピヴァクによる評論を彫琢しつつ、チャン・ロ

---

[6]〔訳註〕『ジャック・デリダ講義録　獣と主権者 I 』西山雄二・郷原佳以・亀井大輔・佐藤朋子訳、白水社、2014 年、428 頁。

ンシーは脱構築の戦略を、ロゴスというギリシャ的概念と道（タオ）という中国的概念との比較から分析している。チャンは比較的アプローチのなかで、老子と荘子の双方を参照しつつ、デリダがロゴス中心主義（すなわち内部／外部の対立を作り出す、エクリチュールの排除）に帰すロゴスがさらに、中国の伝統をも規定していることが示そうとしている。彼は次のような帰結に達する。「ロゴス中心主義は思考のヨーロッパ的方法に宿るのではなく、まさに思考それ自体を構成する」（L. Zhang 1992, 30）。シーン・メイグー（2008, 206）のような学者たちによって共有されている主な関心事は、脱構築の「普遍性」、他の文化地域において生み出されたテクストに対する脱構築の応用可能性についてのものである。チャンの議論の問題点は、彼が最終的に、中国語エクリチュールは、「どんな表音エクリチュールよりも、エクリチュールにおける痕跡の本性や質をよりよく」提示する、と結論づけていることである。この代補の「幻覚」にもかかわらず、チャンは脱構築とタオイズムを比較することを通じて「あらゆるロゴス中心主義の外部」を評価する別の方法への道を切り拓いており、この方法は他の学者もまた取り組んでいるものである（Wang 2003; Burik 2010）。

以下では、チャン、スピヴァク、チョウによって共有されている考え（「中国語エクリチュール」はデリダの『グラマトロジーについて』の限界とポテンシャル、その双方の名である）を別の方向に展開したい。私は、中国の「外部性」とされるものは、中国語エクリチュールの「幻惑された〔hallucinated〕」考え方ではなく、むしろ西洋哲学のテクストの内部にある、「クリプト」に立脚したものだと主張する。

3. 中国語「文字（スクリプト）」

「すべてのロゴス中心主義の外部」に関して、実際の問題は、中国や日本やマヤの文明がロゴス中心主義の地理的、文化的、言語的限界を構成するかどうかではなく、ロゴス中心主義が外部を持ちうるかどうか、である。『グラマトロジーについて』が執拗に疑問を呈している概念のうちのひとつは、実際、まさに「外部」であり、その対義語である「内部」である。この二つの概念は、『グラマトロジーについて』が脱構築しようとしている二重の対立のうちのひとつを構成している。

ライプニッツに関する説明においてデリダが強調するのは、「中国」が他者そして外部として呈示されればされるほど、「中国」はいっそう「家内化され〔domesticated〕」、つまりは西洋のもっとも基礎的な諸前提をいっそう強固にするということである。しかし、エクリチュールの他なる諸形式に対するデリダの関心は、そうした諸形式がその存在論的背景——ロゴス中心主義とアルファベットエクリチュールを結合させることによって、西洋が自己自身の権利を主張する存在論的背景——を問いに付す、ということによって動機づけられている。他なるエクリチュールの形式が確証するのは、西洋が自身の根拠を持たない、というわけではないにせよ、少なくとも自身が排除するものの上に根拠づけられている、ということである。すなわち、エクリチュールの非アルファベット的形式の排除、あるいは、それどころかアルファベット文字（スクリプト）の非表音的側面の排除である。「外部」の観念は、この排除のメカニズムに属する。もちろん、デリダは哲学的テクス

トの内部に漢字を書き込むだけで、より形而上学的ではなくなるのだ、と示唆しているのではない。さらにデリダは、中国語を話したり書いたりすることで、自動的に「あらゆるロゴス中心主義の外部」に出られるだろう、とも主張していない。「パロールとエクリチュールをつなぐもう一つのシステム」（デリダは中国語エクリチュールをこのように特徴づける）という考えは、「まったき他者としてのすべての他者（tout autre comme tout autre）」という後の公式に照らして理解されるなら、より理解可能になる（Derrida 1999, 110; 1996, 78）[7]。還元不可能な他者ではあるが、絶対的な他者ではない。言い換えれば、エクリチュールはつねに、歴史的そして文化的に決定されている（中国語、フランス語、アラビア語などなどとして）。しかし私たちは、どのようなエクリチュールの形式についても、特定の言語の固有性として識別することはできない。いかなる文字（スクリプト）においても、還元不可能な他者性の次元が戯れつつ存在するのである。パウンドやフェノロサと並ぶマラルメへの参照を忘れてはならない。『骰子一擲』について、デリダは三十年後に書いている。「私は、それぞれに異なる文字の大きさや、間隔の組版上の配置を破壊することなしに、このテクストを声に出して、つまりは時間性の直線的な継起のなかで読みあげることはできません。この間隔はもはや、ページの割り振り上の分割や不可逆性を尊重してはいないのです」（2005b, 9）[8]。「間隔〔spacing〕」。外部はすでに内部にある。

「同一性」と「差異」、あるいは「内部」と「外部」の伝統的対立と異なる術語で他性を概念化するために、デリダは「クリプト」概念を持ち出す。この概念はすでに「竪坑とピラミッド」（1982, 69–108）[9]でその輪郭を描かれており、1976 年のデリダによる〔ニコラ・〕アブラハムと〔マリア・〕トロークの読解〔「FORS」〕において明確に発展させられている。クリプトは死者のための容れ物であり、喪のプロセスに属している[10]。デリダはこの概念によって、言語、生と死に関する「特異性」の問いを展開することができるのだ（Lamy-Rested 2017, 123–45）。ここでは、この概念のトポロジカルな構造を焦点化したい。というのも、クリプト概念は、言語、文化、あるいは哲学的システムにおける自己を含む、あらゆる「自己」の逆説的条件を描出するからである。自己は、必然的にそれが排外するもの、あらかじめ外部に置かれていた、内部に持ち込まれるべきものを含意している。アブラハムとトロークはクリプトを構成するプロセスを「体内化〔incorporation〕」と呼んでいる。死せる他者は、その「取り入れ〔introjection〕」（「正常」ではあるがゆっくりとした、労苦を伴う喪のプロセスの結果）がなされていない時、喪のプロセスを通じて体内化される。「体内化」は、「取り入れ」とは異なり、他者の喪失を認めると同時に、喪の作業を拒絶する二重で逆説的なプロセスから帰結する。体内化においては、死せる他者は自己のうちに他者として保存され、同時に自己から排外されるのである。ベニントンが注記しているよ

[7]〔訳註〕デリダ『死を与える』、廣瀬浩司・林好雄訳、ちくま学芸文庫、2004 年、162 頁。

[8]〔訳註〕デリダ『パピエ・マシン』（上）中山元訳、ちくま学芸文庫、2005 年、32 頁。

[9]〔訳註〕デリダ『哲学の余白〈新装版〉』（上）藤本一勇訳、法政大学出版局、2022 年、139-195 頁。

[10]〔訳註〕crypt は語源的にはギリシャ語〈krỳptein〉「隠す」に由来し、「地下納骨堂」、「遺体安置所」を意味すると同時に、〈cryptogram〉（暗号文）、 〈encrypte〉（暗号化）、〈decrypte〉（解読）のような語では「暗号」の意味で用いられる。

うに、「それゆえ、それが支えている内部に潜むもの、外部に現実に存在することのない外部〔…〕クリプトは自我にとって異質な空間であり、したがって、導入されてはいるが、外部に保たれていたほうがよい異質なものの空間、排外的包含〔exclusionary inclusion〕だろう」(Bennington 1993, 147)。したがって、クリプトは「内部」と「外部」というカテゴリーをぼやかすものだ。一方では、クリプトは自己にとって外的である。というのも「他」であり続けるためには、クリプトは到達不可能なものでなければならないからである。クリプトの内容は暗号（クリプト）化された〔encrypted〕ままである。もし脱暗号（クリプト）化〔decrypted; 解読〕されれば、クリプトはもはやクリプトではないだろう。他方、この「体内化」は自身にとっての外在性を制御下に置こうとする自己に由来するのだから、クリプトは自己の内部に属するものでもある。言い換えれば、クリプトは「別の場所に含み込まれていながら、そこから厳密に分離された場所」であり、「内部の内側において排除されたある外部」である（Derrida 2005c, xiv）[11]。

同時期のテクスト「スクリッブル（権力／書くこと）」では、デリダはクリプトの概念化を、ウィリアム・ウォーバートンの『モーセの聖なる派遣の証明』(1737) における象形文字エクリチュールを扱った節の、レオナール・ド・マルペンヌによる影響力ある翻訳の読解を通じて展開している。しかしライプニッツ読解の場合もそうであったように、デリダはマルペンヌあるいはウォーバートンを現代考古学あるいは現代言語学の見地から批判する訳ではない。デリダの興味を惹くのは、西洋科学が、その内部とその外部をエクリチュールについての省察を通じて決定する、その仕方である。クリプトは、デリダによるウォーバートン読解においては、現存しない異郷の文明の謎めいた象形文字ではなく、むしろ解読の科学的プロジェクトに覆い隠された無意識的な力である。デリダが問いに付すエクリチュールの歴史にかんする主流の理解においては、エジプト語の象形文字は権力の秘教的道具の役割を果たし、一方ギリシャ語のようなアルファベットシステムは透明性と普遍主義に貢献するとされている。しかしアルファベット言語は決して純粋に表音的であることはなく、暗号（クリプト）化の重要な部分、すなわち外部（文字あるいはシニフィアン）と内部（音あるいはシニフィエ）の区別によっては支配され得ない、諸力の戯れを含んでもいる。エクリチュールの特定の形式が権力の特定の形式に貢献しているという断言は、究極的には、あらゆるテクストを構成する諸力の衝突の空間（暗号（クリプト）化の遊び）を否定するやり方である。それゆえデリダは、象形文字とアルファベット文字を対立させるのではなく、象形文字の価値を一般化し、それを「エクリチュールの範例的な中心なのであり、エクリチュールの中間媒体であり、原基であり、種でありかつ属でもあり、部分でもあり全体でもあり、一般的エクリチュール」とみなす（1979, 128）[12]。

これは、デリダが『グラマトロジーについて』で中国語エクリチュールについて述べていることと大きく異なるものではない。ライプニッツ、パウンド、あるいはジェルネのような中国学者

---

[11]〔訳註〕ニコラ・アブラハム／マリア・トローク『狼男の言語標本：埋葬語法の精神分析／付・デリダ序文 «Fors»』港道隆ほか訳、法政大学出版局、2006 年、178-179 頁。

[12]〔訳註〕デリダ『スクリッブル――権力／書くこと　付・パトリック・トール「形象変化（象徴的なものの考古学）」』大橋完太郎訳、月曜社、2020 年、42 頁。

のテクストでさえ、中国語 文字（スクリプト）はクリプトとしても機能しており、諸々のエクリチュールの体系間の「表音的」、「非表音的」という概念的区別に抵抗しているのである。この中国語「文字（スクリプト）」は、「外部」と「内部」というカテゴリーがデリダの中国への言及で問題となっていることを全面的にカバーしてはいない、ということを思い出させてくれる。デリダによるライプニッツ、ウォーバートン、パウンド、あるいはソシュール読解のポイントは次の点の提示にある。デリダが示すのは、西洋の長い伝統が「中国語 文字（スクリプト）」を慣習的な概念のフレームワーク（「恣意的〔無契的〕／有契的」、「表音的／非表音的」、「表音文字／表意文字」など）を通じて理解しようと試みるとき、つまりは家内化し排外しようとするときすでに、もはや制御不可能なクリプトを産出してしまっていることである。私は、西洋哲学のテクストの内部におけるこのクリプトのもっとも産出的な（そして問題含みの）徴候のひとつが、まさに、絶対的な他者としての中国、というオリエンタリスト的な考えであることを示したい。中国語エクリチュールが「あらゆるロゴス中心主義の外部」であるというデリダの示唆は、この暗号化された論理の偏在を確証する。しかし彼の哲学が脱構築するのもこの論理である。

4. 差延〔**Différ*a*nce**〕: 中国語？

事実上、〈différ*a*nce〉概念はすでに、クリプトの論理を露呈している。純粋に表音的でも、純粋に非表音的でもないこの語の逆説的な諸性質は、この語を一種の象形文字あるいはシノグラフにしているのである。

デリダが述べているように、「e と a の 表記上（グラフィック）の差異が機能しうるのは、ただ表音的エクリチュールのシステム内部においてのみであり、また表音的エクリチュールならびにそれと不可分な文化全体に歴史的に結びついている 言語（ラング）もしくは文法の内部においてのみである」(Derrida 1982, 4)[13]。デリダがアルファベット 文字（スクリプト）だけが表音的でありうると示唆していようがいまいが、それにかかわらず、ここで重要なのは以下のような結論である。「いわゆる表音エクリチュールの内部でのみ機能するこの沈黙〔silence〕こそが〔…〕きわめて時宜を得た仕方で、或る巨大な偏見に反して、表音的エクリチュールなるものは存在しないということを告げている」(Ibid.)。

〈différ*a*nce〉は、表音的記号と非表音的記号の言語学的区別を問いに付すだけではない。〈différ*a*nce〉は、表記的（グラフィカル）な変種として、また無言のままにとどまる概念的操作として、クリプトとしてのフランス語に「所属している」。『グラマトロジーについて』におけるデリダの中国語に対する手短な言及の要点を、〈différ*a*nce〉の観点に照らして考察するならば、彼の述べることのほとんど全てが〈différ*a*nce〉の働きにも当てはまることがわかる。（１）アルファベットという純粋な概念は〈différ*a*nce〉を説明することができない。というのもアルファベットの文字群は読解行為において、その固有の空間性を中性化〔無力化〕し、その意味するところである言語的シニフィエの純粋に表音的な次元を回復することで、消失することが前提されているからである。しかしながら、〈différ*a*nce〉の〈a〉は声に出して表現されえない差異を 表記的（グラフィカル）に、つまりは空間的に

[13] 〔訳註〕デリダ『哲学の余白』（上）、36 頁。

位置づけるのである。（２）しかし、〈différ*a*nce〉の働きは表記的ではあるが、その働きは他のフランス語の単語と同様「音声的」なものであって、エクリチュールとパロールとの関係を分裂させはするものの、廃棄するわけではない。（３）したがって、デリダが中国語エクリチュールについて主張すること（そしてあらゆる他の文字（スクリプト）についても同様に主張しうること）は、〈différ*a*nce〉にも当てはまる。すなわち〈différ*a*nce〉においては、「エクリチュールは〈声〉を自身へと還元するのではなく、システムのうちに組み入れたのである」（Derrida 1967, 138; 1998b, 90, translation modified〔上 188〕)。（４）結局のところ、この〈a〉の接ぎ木は、ヤコブソンが「言語内翻訳」と呼んだもの（1959, 182; cf. Derrida 2007, 198）[14]、あるいは単一言語――〈différ*a*nce〉のケースにおいてはフランス語――の内部での翻訳の限界を露呈させる。〈a〉は（différ-er、différ-ant、différ-ence のように）同じ形態素根「differ-」のさまざまな偏差の意味を統合するだけではなく、表記上（グラフィック）かつ意味論的なバリエーションを純粋に音声的な等価物へと「翻訳」することの不可能性を示すのである。〈différ*a*nce〉はある程度の範囲まで「あらゆるロゴス中心主義の外部」にあり翻訳不可能であるが、「内側」にもあり、翻訳可能でもある。いずれにせよ〈différ*a*nce〉は、言語内翻訳と言語外翻訳のあいだの境界は、決して純粋なものではないことを示すのである。

読者の中には、私が〈différ*a*nce〉を中国語と見做し、実際にはデリダの誤った中国語観を再生産し、中国語エクリチュールを非表音的なものと仮定しているのではないか、と考える者もあるかもしれない。しかし、〈différ*a*nce〉はいまだなお音を再現前化するシニフィアンである。非表音的なのは、ただ〈différence〉〔差異〕と〈différ*a*nce〉〔差延〕の差異のみである。この差異は聴き取られえない。フランス語のエクリチュールは、デリダが中国語に投影したとされている特徴〔traits; 描線〕のすべてをすでに体現している。そういうわけで、エクリチュールに関する西洋哲学的な諸概念を脱構築するために、デリダがとりわけ中国語 文字（スクリプト）の幻惑させる概念に頼る必要はないのである。

〈différ*a*nce〉が中国語であり、フランス語が中国語クリプトを含んでいると主張することは、さらに、次のことを思い起こさせるものである。すなわち、ヨーロッパの思想の伝統において――その言語とエクリチュールは、歴史上のある時点で中国語（および他の非アルファベット 文字（スクリプト））との対立によって定義されたのだが――拒絶されたエクリチュールの属性（代補性、技術性、空間性など）が、すでに西欧の科学思想と形而上学の体系にそのクリプトとして「属している」ということを。そして、〈différ*a*nce〉がもしフランス語における外来語としてとどまったままなのだとすれば、その翻訳が問題とすることは、ある言語から別の言語へと意味を通過させる〔passing〕ことがではない。むしろ、問題は言語とエクリチュールの間の境界の多孔性を探ることなのである。

---

[14]〔訳註〕ローマン・ヤコブソン『一般言語学【新装版】』川本茂雄監修、みすず書房、2019 年、57-58 頁。以下も参照のこと。デリダ『プシュケー　他なるものの発明 I 』藤本一勇訳、岩波書店、2014 年、291 頁。

5. 「文字（スクリプト）」を翻訳する

他のあらゆる「文字（スクリプト）」と同様、この〈différ*a*nce〉という語も、この語をフランス語と中国語の双方に置き入れることなしには、「フランス語」にも「中国語」にも翻訳されえない。多くの翻訳者は、この言葉をフランス語の「暗号（クリプト）的〔cryptic〕」な形態のままにしておくことを選ぶが、〈a〉の戯れを対象となる言語で再生産しようと試みる者もある。たとえばデリダを最初にスペイン語に訳した翻訳者は、〈différ*a*nce〉を〈difer*a*ncia〉または〈diferen*z*ia〉と訳した（Derrida 1975; 1989）。前者は発音を変じさせて〈a〉を接ぎ木し、それに対し後者は非表音的なもの、表記的なもの、無音の差異をリテラルに翻訳している（スペイン語では〈c〉と〈z〉は同じ音素を表象する）。ギリシャ語の翻訳者も、差異を表すギリシャ語の〈διαφορά〉（diaphorá）を〈διαφωρά〉（diaphôrá）に変形させることで同様の方途をたどっている（Derrida 1990）。このように〈a〉への参照かもしくは無音の差異を再現するような翻訳の戦略は、アルファベット言語の境界内でのみ可能であり、中国語はリテラルな仕方でも、アナロジーによっても翻訳することができない。これは中国語文字（スクリプト）が非表音的だからではなく、それが別の仕方で表音的だからである。仮に、中国語における /a/ の音を表象するいくつかの音の構成要素を用いて、〈différ*a*nce〉の〈a〉を表現するために新たな文字を作るか、既存の文字を借りることができたとしても、参照されるのは母音ではなく音素であり、さらにそれは「無音の差異」でさえない。二十世紀にローマ字表記のシステムと注音符号（zhùyīn fúhào）の半音節文字が導入されるまでは、中国語エクリチュールのアルファベット的分解は存在しなかったのである（紀元前三世紀に辞書編纂の目的で導入された反切（*fǎnqiè*）法のみ存在し、これは、ある文字を用いて他の文字の近似した発音を示すことができた）。しかし、繰り返すように、これは中国語が非表音文字（スクリプト）であることを意味するのではなく、中国語が文字を通じてパロールを伝達しないということを意味するに過ぎない。

ここで、〈différ*a*nce〉の標準的な中国語訳である〈*yányi*〉（延異）という新語を考察してみよう。この語はミシェル・イエが、デリダと荘子の先駆的比較の文脈で作り出したものである。〈*yányi*〉は、中国語の〈*chāyi*〉（差異）（同一性と対立する差異）と〈*shùnyán*〉（順延）（時間的な意味での差異、延期すること）の 2 つの単語を結合したものである（Yeh 1982, 15; 1983, 106; 同様の 2 つの単語を結合する戦略は、ブルガリア語の翻訳の場合にも見られる Tenev 2020 参照）。

この二つの単語を組み合わせることで、翻訳者は、フランス語において〈différ*a*nce〉が伝達するこの二つの主要な意味的次元（すなわち、フランス語の〈différ*a*nce〉の語源であるラテン語の〈differre〉が持つ二つの意味。遅延することならびに「空間的」意味で同じではないこと、延期することと相異なること）を訳出している。この翻訳は、英語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語のどの翻訳よりも、意味という観点から見ればいっそう忠実である。しかし、〈a〉を犠牲にすることで、この翻訳はいっそうリテラルではなくなり、あたかもフランス語の〈différ*a*nce〉ほどには「中国語」ではないものになっているかのようである。

もはや明らかなように、ここでは翻訳の問題が本質的なものとなっている。アルファベットであろうとなかろうと、ロゴス中心主義的であろうとなかろうと、（中国語を含む）すべての言語や文字（スクリプト）は、デリダが「音声中心主義」と呼ぶもの——既に見たように、それを限られた文化圏に同

化させることはできない——に縛られているように思われる。しかし、「音声中心主義」の概念は、〈différance〉の概念と同様、中国語にもフランス語にも同一的に翻訳されるものではないのであって、その脱構築は伝統的な意味で「普遍的」なものではないのである。

デリダの文化越境的（トランス・カルチュラル）な哲学への真の貢献の一つは、他者との関係を翻訳の観点から理解することに存している。〈deconstruction〉という語の翻訳の仕方についてデリダにアドバイスを求めた日本のイスラム学者、井筒俊彦に宛てた手紙の中で、彼は次のように述べている。

> 私は翻訳がもとの言語やテクストに対して副次的で派生的な出来事だとは思いません。[…]「脱構築」（なるもの）にとっての好機（チャンス）、それは、同じ事柄（同じことでありながら他であるもの）をいうために、脱構築について語り脱構築を他の場所へ連れ出すために、脱構築を転写するために、他の語（同じでありながら他である語）が日本語で見つけ出され、発明されることでしょう。（2008, 6）[15]

「別の言葉」は、翻訳において、「文字（スクリプト）」のポテンシャルを高めている。「別の言葉」は、ここでは日本語、そこでは中国語というように、他者の言葉によって、さらに他者の言葉を通じて呼ばれるのだ。デリダは次のように述べることでさらに先にいく。デリダによれば、他者のエクリチュールがより美しくなるのは、その異国趣味（エキゾチシズム）によるのではない。それが美しいのは、彼が「翻訳」を「詩と同様のリスクと好機（チャンス）とを伴うもの」として理解しているからなのである。

別の日本の学者、豊崎光一はヴィクトル・セガレンについて省察しつつ、「文字（スクリプト）」の問題について興味深い指摘をしている。セガレンもまた中国語エクリチュールの「突破」のポテンシャルを信じていた詩人である。豊崎によれば、『碑〔Stèles〕』〔セガレンの著作〕の日本語訳は中国語の縦書き文字（スクリプト）とフランス語の横書き文字（スクリプト）とのあいだの緊張関係を再現することはできない。日本語は漢字を自身のエクリチュール・システムに結合しており、そのため『碑』の原典におけるフランス語文字（スクリプト）と中国語文字（スクリプト）間のあいだのギャップは、セガレンのテクストとその日本語訳のあいだのいっそう大きなギャップへと転じるのである。翻訳への抵抗は、中国語そのものに由来するのではなく、その音声的あるいは表記的（グラフィカル）な次元から由来するのでもない。それはフランス語のアルファベットを、パロールを表象＝代理するための単なる道具とみなす慣習に由来するのだ。それはあたかも、フランス語の「文字（スクリプト）」が日本語のテクストの内部で作用しているかのように。したがって、豊崎によれば、「翻訳者は、ぜひともそれを削減〔還元〕しようと努めるのではなくて、そのギャップを単に主張しなければならない」（Toyosaki 2013, 248, my translation）。

『グラマトロジーについて』における中国語（ひとつの「文字（スクリプト）」、西洋哲学のテクストにその「外部」の形象として所属している）への参照は、この観点からすると、すでにギャップを主張する方途であった。もっと後のテクスト、『他者の単一言語使用』は、翻訳の論理をクリプトのそれに非常に近い術語系で描写している。翻訳は他者を所与の言語の内部へと連れていくが、しか

[15] 〔訳註〕デリダ『プシュケー　他なるものの発明Ⅱ』藤本一勇訳、岩波書店、2021年、9頁。

しその内部でさえ、他者は異郷のものにとどまっており、「言語の自己自身への関係」の一部分にはならないのである。したがって、「外部」とは「あらゆる言語の自己への非‒同一性」にほかならず、あらゆる「内的翻訳」は、自己の内部に他者を刻印する（Derrida 1998a, 65）[16]。あらゆる言語のこうした構造的次元は、たとえそれがいわば「形式的原理」にとどまるとしても、還元不可能な他者性を導入する。「表意文字」、「表音文字〔phonograph〕」、さらには「原(アルシ)‒エクリチュール」などの諸概念を用いてこの原理を脱暗号(クリプト)化〔解読〕しようと試みるや否や、その身振りは発見、概念、理論、解釈の歴史に結びつけられるが、こうしたものの文脈化は、それがもたらす絶対的他者性という幻覚を解消するのに十分である。

翻訳の逆説的論理によれば、「翻訳不可能なもの」は何もないが、「あるいは、さらに言えば、翻訳可能なものも」何もない（Derrida 2001, 178）。この論理が、同一性と同一化、差異と差異化、排除と家内化の諸効果を産出し、西洋哲学のテクストにおける――そしてさらにはその文字(スクリプト)の素朴な中国的理解における――中国語エクリチュールの長きにわたっての暗号(クリプト)化を特徴づける。この観点から、中国語文字(スクリプト)を「あらゆるロゴス中心主義の外部」に位置づけることは、我有化〔appropriation〕の身振り（批判者たちはこの点において正しい）であると同時に、この我有化に対する批判でもある（あるいは、最低でもそれを避けようとする試みである）。単純化すれば、翻訳が逆説的なのは、それが二つの極を産出するからなのだ。一方の極は諸言語のあいだの差異の本質化であり、他方の極はこうした差異の透明性あるいは中性化という幻覚である。だからこそ、『グラマトロジーについて』においても、またビアンコに関するテクストにおいてもデリダが要求するのは、翻訳（自己の言語に対する他者の到来）が生じるその歴史的状況の考察である。したがって、脱構築にとって、「中国語文字(スクリプト)」はヨーロッパの無意識の固有名ではありえないし、「中国語」は西洋の絶対的他者ではありえない。たとえこの文字(スクリプト)が、「オリエンタリズム」、「オクシデンタリズム」、「文化越境主義」、「家内化」、「受け入れ」、「投影」などといった、私たちにとってすでに身近な、排除から歓待までのあらゆる反応（しばしばその両方を同時に）を産出する、ある種の中国的暗号(クリプト)化であったとしても、である。

マティアス・オーバート（2009, 316, 318）が、デリダの「ひとつならずの言語＝もはや言語はない〔*plus d'une langue*〕」という似た着想を引用しつつ指摘するように、他者との接触におけるこの内的ギャップの経験は、東アジアの、とりわけ中国語使用の文脈における哲学の現実である。オーバートは、「西洋」哲学が中国語で読み書きされている台湾で既に起こっているように、文化越境性〔transculturality〕を出発点として、西洋哲学における他者との関係を再考することを提唱している。私たちは文化越境性を、デリダ的な術語で、翻訳のための「準‒超越論的な」条件として解釈することができる。今日、経験的・歴史的文脈なしには、中国哲学あるいは文学のいっそう速い「私たち‒への‒到来」は生じえないのである。このことが意味するのは、脱構築が西洋哲学に対して、翻訳し続けること、そして翻訳を通じて、「絶対的な外部」というファンタジーに抗

[16] 〔訳註〕デリダ『たった一つの、私のものではない言葉――他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、2001 年、124 頁。

議し続けることを要求しなければならない、ということである。脱構築とは、複数の他者とのあいだで、さらには複数の他者と複数の自己の内部で、ギャップについて交渉する、批判的（そして歓待的な！）方途を見つけ出すことでなければならない。

この論文で私は、したがって、「哲学的な中国」、つまり西洋思想による利用やその脱構築のために作られた「中国」の観念をデリダが再生産しているという告発に対して、デリダを弁護しようとしたのではない。私が示そうとしたことを違ったやり方で翻訳するのであれば、中国語エクリチュールが「すべてのロゴス中心主義の外」である、というデリダによる多義的な主張が、おそらく、中国語翻訳における西洋的クリプトの「ギャップを主張する」方途にほかならないということである。

参考文献

Bennington, Geoffrey (1993), 'Derridabase', in Jacques Derrida, by Geoffrey Bennington and Jacques Derrida, Chicago: University of Chicago Press.

Billeter, Jean François (2014), Contre François Jullien, Paris: Allia.

Bohm, Arnd, Henry Staten, and Rey Chow (2001), 'Derrida and Chinese Writing', PMLA 116:3, pp. 657–660.

Burik, Steven (2010), The End of Comparative Philosophy and the Task of Comparative Thinking: Heidegger, Derrida, and Daoism, Albany: State University of New York Press.

Chang, Han-Liang (1988), 'Hallucinating the Other: Derridean Fantasies of Chinese Script', working paper presented at Representations of Otherness: Cultural Hermeneutics, East and West Conference, Center for Twentieth Century Studies (University of Wisconsin–Milwaukee).

Cheng, Jiewei (1995), 'Derrida and Ideographic Poetics', The British Journal of Aesthetics 35:2, pp. 134–144.

Chow, Rey (2001), 'How (the) Inscrutable Chinese Led to Globalized Theory', PMLA, 116:1, pp. 69–74.

Claro, Andrés (2012), Las vasijas quebradas: cuatro variaciones sobre 'la tarea del traductor', Santiago, Chile: Ediciones Universidad Diego Portales.

Dascal, Marcelo (1978), La Sémiologie de Leibniz, Paris: Aubier Montaigne.

DeFrancis, John (1986), The Chinese Language: Fact and Fantasy, Honolulu: University of Hawaii Press.

Derrida, Jacques (1967), De la Grammatologie, Paris: Éditions de Minuit.

——— (1972a), La Dissémination, Paris: Éditions du Seuil.

——— (1972b), Marges de la philosophie, Paris: Éditions de Minuit.

——— (1975), La diseminación, trans. by José Martín Arancibia, Madrid: Fundamentos.

——— (1979), 'Scribble (Writing-Power)', trans. by Cary Plotkin, Yale French Studies, 58, pp. 117–147.

——— (1981), Dissemination, trans. by Barbara Johnson, Chicago: University of Chicago Press.

——— (1982), Margins of Philosophy, trans. by Alan Bass, Chicago: University of Chicago Press.

——— (1989), La escritura y la diferencia, trans. by Patricio Peñalver, Barcelona: Anthropos.

——— (1990), Περί Γραμματολογίας [Peri Grammatologias], trans. by Kostis Papagiorgis, Athens: Gnose.

——— (1996), The Gift of Death, trans. David Wills, Chicago: University of Chicago Press.

——— (1998a), Monolingualism of the Other, or The Prosthesis of Origin, trans. by Patrick Mensah, Stanford: Stanford University Press.

——— (1998b), Of Grammatology, trans. by Gayatri Chakravorty Spivak, corrected edition, Baltimore: Johns Hopkins University Press.

——— (1999), Donner la mort, Paris: Éditions Galilée.

——— (2001), 'What Is a "Relevant" Translation?', trans. by Lawrence Venuti, Critical Inquiry 27:2, pp. 174–200.

——— (2005a), 'Signé l'ami d'un ami de la Chine', in Aux origines de la Chine contemporaine: en hommage à Lucien Bianco, edited by Marie-Claire Bergère, Paris: L'Harmattan.

——— (2005b), Paper Machine, trans. Rachel Bowlby, Stanford, Stanford: Stanford University Press.

——— (2005c), 'Fors: The Anglish Words of Nicolas Abraham and Maria Torok', in The Wolf Man's Magic Word: A Cryptonymy, by Nicolas Abraham and Maria Torok, trans. by Nicholas Rand, Minneapolis: University of Minnesota Press.

——— (2007), Psyche: Inventions of the Other. Volume I, trans. by Peggy Kamuf and Elizabeth G. Rottenberg, Stanford: Stanford University Press.

——— (2008), Psyche: Inventions of the Other. Volume II, trans. Peggy Kamuf and Elizabeth G. Rottenberg. vol. II, Stanford: Stanford University Press.

——— (2011), The Beast and the Sovereign. Volume I, trans. Geoffrey Bennington, Chicago: University of Chicago Press.

Derrida, Jacques, and Zhang Ning (2020), 'Entretien avec Jacques Derrida en préface à la traduction chinoise de L'Écriture et la différence', Revue ITER, 2.

Février, James (1984), Histoire de l'écriture, Paris: Payot.

Gernet, Jacques (1963), 'La Chine, aspects et fonctions psychologiques de l'écriture', in L'Écriture et la psychologie des peuples, Paris: Armand Colin.

Hayot, Eric (2011), Chinese Dreams: Pound, Brecht, Tel Quel, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Jakobson, Roman (1959), 'On Linguistic Aspects of Translation', in On Translation, edited by Reuben A. Brower, Cambrigde: Harvard University Press.

Jirn, Jin Suh (2015), 'A Sort of European Hallucination: On Derrida's "Chinese Prejudice"', Situations 8:2, pp. 67–83.

Jung, Hwa Yol (1984), 'Misreading the Ideogram: From Fenollosa to Derrida and McLuhan', Paideuma, A Journal Devoted to Ezra Pound Scholarship 13:2, pp. 211–228.

Klein, Melanie (1985), 'The Role of the School in the Libidinal Development of the Child', in Love, Guilt

and Reparation: And Other Works: 1921-1945: The Writings of Melanie Klein, vol. 1, London: Hogarth Press.
Lamy-Rested, Élise (2017), Excès de vie, Derrida..., Paris: Kimé.
Meighoo, Sean (2008), 'Derrida's Chinese Prejudice', Cultural Critique, no. 68, pp. 163-209.
Milesi, Laurent (2018), 'Chinoiseries : Hallucinating Derrida Hallucinating China', Oxford Literary Review 40:1, pp. 95–107.
Obert, Mathias (2009), 'Begegnung mit der chinesischsprachigen Welt heute. Weder komparativ noch interkulturell!' Zeitschrift für Kulturphilosophie 3:2, pp. 313–21.
Saussy, Haun (2002), "The Prestige of Writing", in Great Walls of Discourse and Other Adventures in Cultural China, Cambridge: Harvard University Asia Center.
——— (2008), 'Fenollosa Compounded: A Discrimination', in The Chinese Written Character as a Medium for Poetry: A Critical Edition, by Ernest Fenollosa and Ezra Pound, edited by Haun Saussy, Jonathan Stalling, and Lucas Klein, New York: Fordham University Press.
Spivak, Gayatri Chakravorty (1998), 'Translator's Preface', in Of Grammatology, by Jacques Derrida, corrected edition, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
Tenev, Darin (2020), 'Derrida in Bulgarian', Revue ITER, 2.
Toyosaki, Koichi (2013), 'Traduction', in Les Fins de l'homme: À partir du travail de Jacques Derrida, edited by Philippe Lacoue-Labarthe, Edith Heurgon, and Jean-Luc Nancy, Paris: Hermann, pp. 245–253
V.-David, Madeleine (1965), Le Débat sur les écritures et l'hiéroglyphe aux XVIIe et XVIIIe siècles et l'application de la notion de déchiffrement aux écritures mortes, Paris: École Pratique des Hautes Études.
Wang Youru (2003), Linguistic Strategies in Daoist Zhuangzi and Chan Buddhism: The Other Way of Speaking, London: Routledge.
Widmaier, Rita (1983), Die Rolle der Chinesischen Schrift in Leibniz' Zeichentheorie, Wiesbaden: Franz Steiner.
Yeh, Michelle Mi-Hsi (1982), 〈解結構之道：德希達與莊子比較研究〉["Jiěgòu zhī dào: Déxīdá yǔ Zhuāngzǐ bǐjiào yánjiū"], Chung Wai Literary Quarterly 11:6, pp. 4–31.
——— (1983), 'The Deconstructive Way: A Comparative Study of Derrida and Chuang Tzu', Journal of Chinese Philosophy 10:2, pp. 95–126.
Zhang, Longxi (1992), The Tao and the Logos: Literary Hermeneutics, East and West, Durham: Duke University Press Books.
Zhang Ning (2002), 'Jacques Derrida's First Visit to China: A Summary of His Lectures and Seminars', Dao 2:1, pp. 141–62.
Zhong, Yurou (2019), Chinese Grammatology: Script Revolution and Literary Modernity, 1916–1958, New York: Columbia University Press.

〔日本語の参考文献〕

・デリダの著作
ジャック・デリダ『根源の彼方に　グラマトロジーについて』（上）・（下）、足立和浩訳、現代思潮社、1972 年
デリダ『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、2001 年
デリダ『死を与える』、廣瀬浩司／林好雄訳、ちくま学芸文庫、2004 年
デリダ『パピエ・マシン』（上）中山元訳、ちくま学芸文庫、2005 年
デリダ『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013 年
『ジャック・デリダ講義録　獣と主権者Ⅰ』西山雄二／郷原佳以／亀井大輔／佐藤朋子訳、白水社、2014 年
デリダ『プシュケー　他なるものの発明Ⅰ』藤本一勇訳、岩波書店、2014 年
デリダ『スクリッブル——権力／書くこと　付・パトリック・トール「形象変化（象徴的なものの考古学）」』大橋完太郎訳、月曜社、2020 年
デリダ『プシュケー　他なるものの発明Ⅱ』藤本一勇訳、岩波書店、2021 年
デリダ『哲学の余白〈新装版〉』（上）藤本一勇訳、法政大学出版局、2022 年

・その他の文献
ガヤトリ・C・スピヴァク『デリダ論　『グラマトロジーについて』英訳版序文』田尻芳樹訳、平凡社ライブラリー、2005 年
ニコラ・アブラハム／マリア・トローク『狼男の言語標本：埋葬語法の精神分析／付・デリダ序文 «Fors»』港道隆ほか訳、法政大学出版局、2006 年
ローマン・ヤコブソン『一般言語学【新装版】』川本茂雄監修、みすず書房、2019 年

Reprinted by permission of Héctor G. Castaño.